2026年7月2日
第2回　第10期介護保険事業（支援）計画策定に向けた準備セミナー
テーマ「共生社会を実現するための認知症施策を考える」

認知症介護研究・研修東京センター
センター長特命補佐
永田久美子

『新しい認知症観』に基づく施策の立案と展開

～地域特性を活かした創意工夫～

全国それぞれの地域で、人が暮らし、つながり、固有の文化がある

認知症になってからも、自分らしく生ききるために、
地域に根差したわがまちならではの施策の推進を、ともに

参考

全国の市町村の基本情報

	最小 a	最大 b	備考
人口　　（人）	161	3,772,267	b/a：23430倍
高齢化率（%）	17.4	68.8	40%以上が約3割
面積　（km ^{2}）	3.47	2,177.61	b/a：628倍
人口密度（/km ^{2}）	1.22	23,905.53	b/a：19595倍

市町村　：全国1741の内、福島県の帰還困難地域のある町をのぞく
人口　　：2025年10月1日現在の国勢調査確定人口
高齢化率：2026年4月　住基台帳情報
面積　　：2025年7月1日の国土交通省国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」

永田久美子：「わがまちならではの共生社会を〈ともに〉創る推進役
～認知症地域支援推進員の今とこれから～」、地域ケアリング　28（8）、2026

今日、お伝えしたいこと・一緒に考え進めていきたいこと

１．今、どこにいて、どこに向かうのか？

＊ 認知症をめぐる社会と施策の変遷：今の「立ち位置」の確認

＊ これからの方向性・方針・焦点の（再）確認と共有

＊「認知症施策推進計画」の重要性

２．『新しい認知症観』に基づく施策の立案と展開のポイント

～各地の試行錯誤を参考に～

課題山積の中で、ともに、楽に、よりよい日々に

１．今、どこにいて、どこに向かうのか？

＊認知症をめぐる社会と施策の変遷： 今の「立ち位置」の確認

＊ これからの方向性・方針・焦点の（再）確認と共有

＊「認知症施策推進計画」の重要性

認知症をめぐる社会と施策の変遷（ダイジェスト）

６０年以上をかけて無数の人たちによる試行錯誤　→　今、未来を見据えて、重要な変革期

「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」

令和5年6月14日成立　令和6年1月1日施行

★　方　向　性

＊認知症の人が尊厳を保持しつつ希望をもって暮らすことができる

＊共生社会

認知症の人を含めた国民一人一人がその個性と能力を十分に発揮し、
相互に人格と個性を尊重しつつ支え合いながら共生する活力ある社会

認知症施策・すべての取組の根本となる考え方

基本理念

＊抜粋

①基本的人権：全ての認知症人が享有、個人として自らの意思で生活を営むことができる

②認知症の人に関する理解：認知症に関する正しい知識、認知症の人に関する理解を深める

③生活上の障壁除去（バリアフリー）：地域で安心・安全・自立、意見表明・社会活動に参画

④認知症の人の意向を十分に尊重したサービス：保健医療・福祉サービスの切れ目ない提供

⑤家族等に対する支援：認知症の人及び家族等が地域で安心して生活

⑥共生社会の実現に資する研究等の推進、成果を広く国民が享受できる環境を整備

⑦各関連分野の総合的な取組：教育、地域づくり、雇用、保健、医療、福祉、その他

・本人（次に続くすべての人たち）が、主体（主人公）。
・人としてあたりまえに暮らせる社会に。　＊自分自身が、自分事として。

政府「認知症施策推進基本計画」2024年12月

基本的方向性

〇共生社会の実現を目指す

〇認知症の人本人の声を尊重、「新しい認知症観」に基づき施策を推進

①「新しい認知症観」に立つ
②自分ごととして考える
③認知症の人等の参画・対話
④多様な主体の連携・協働

基本的施策

＊方針

〇本人の声を起点とする

〇本人の視点にたつ

〇本人や家族等とともに推進

※12項目を設定　注）共生社会実現の手段

重点目標等

①新しい認知症観の（実感的）理解
②認知症の人の意思の尊重
③地域での安心な暮らし
④新たな知見や技術の活用

※評価：プロセス＋アウトプット＋アウトカム

推進体制等

〇地方自治体において、地域の実情や特性に即した取組みを創意工夫しながら実施

〇地方自治体の計画策定に際しての柔軟な運用（既存の介護保険事業計画等との一体的策定など）

①行政職員が、様々な接点を通じて、本人や家族等と出会い・対話
②ピアサポート活動や本人ミーティング等の当事者活動を支援
③本人や家族等の意見を起点として、施策を立案、実施、評価する。

施策を通じて変革を推進

1．認知症の考え方を変える：「新しい認知症観」をみんなの常識に
＊自分事として考える

2．関係性を変える：「支援する-される」から、「ともに」
＊立場や職種を超えて、人と人として

3．取組方を変える：本人の声を起点に地域のみんなが参画、共に創る（共創）

★認知症の本人
＊家族等
＊地域の人たち、地域で働く人たち
＊医療・介護・福祉の専門職
＊多様な部門の行政職員

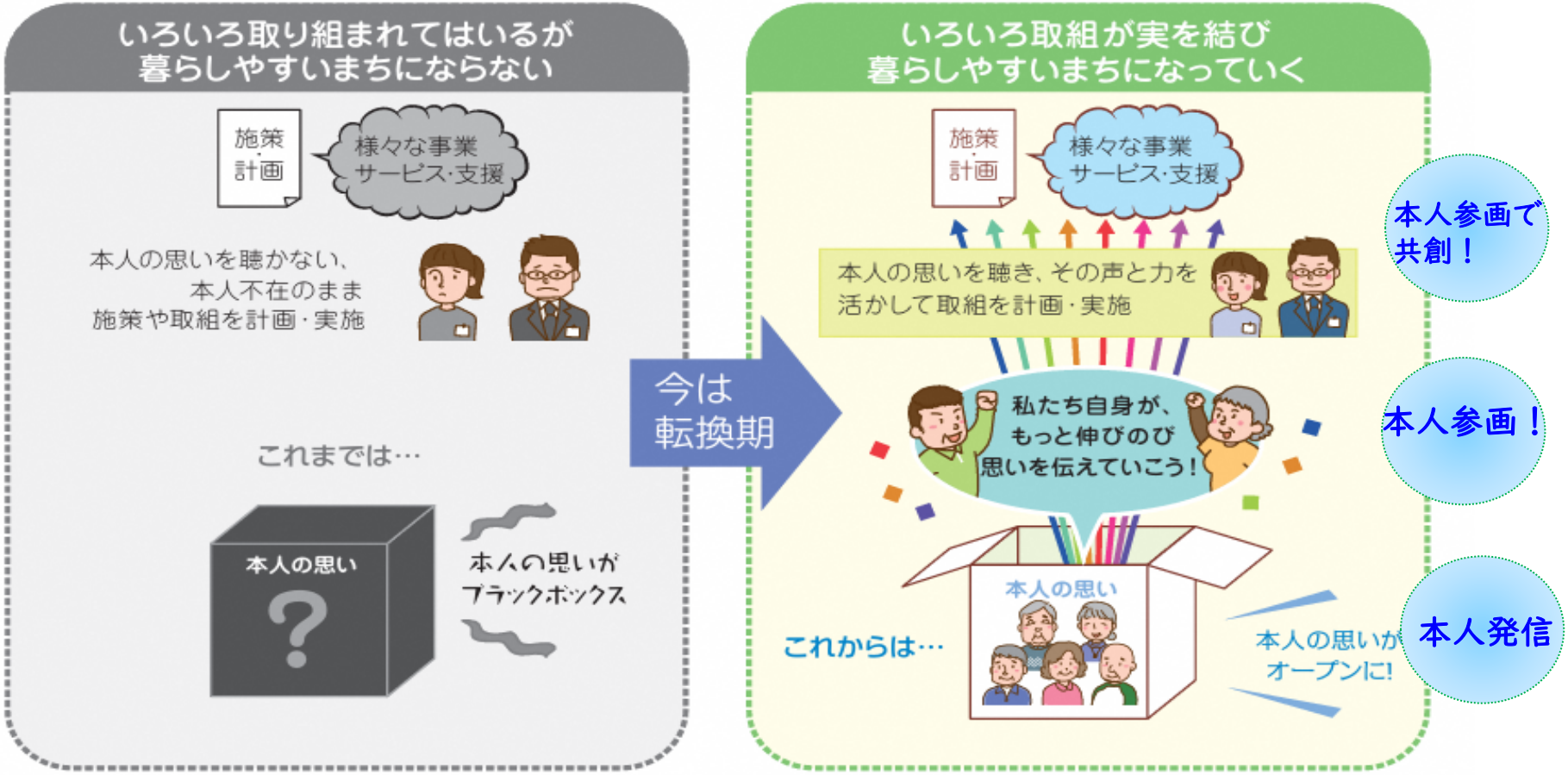
活力・共生社会を生み出す基盤固めを
＊今の計画づくりでしっかりと

認知症施策は、本人の声を起点に本人参画で進める

★都道府県・市町村向け　認知症施策を本人参画でともに進めるための手引き　p.10

これまでの施策・計画、取組
（本人の声や力を活かさず、実質の成果があがらない）

これからの施策・計画、取組
（本人の声や力を活かして、実質の成果をあげていく）



認知症になってからも自分らしく希望をもって生きる人・とも生きる人が各地で増加中

<不可能ではなく、実現可能な時代になってきている>

認知症　発症　軽度　　中等度　　重度　　周死期

仕事を続ける

有償ボランティア
人手不足の企業の助っ人

まちをきれいに
地域に貢献

学校帰りの子供らと
ともに

好きな所へ外出を続ける。
仲間とともに

一人で買物を続ける。
お店にとっての
大事なお客さん

施設で暮らし
なじみの店での
外食を楽しむ

地域の中で
いい日々を最期まで

どの地域でも、考え方・関係性・取組方を変え、
自分らしく希望を持って生きていく・ともに生きることを、地域のあたりまえに

施策・計画を通じて、変革の推進を

これからの方向性・方針・焦点（注力すべきこと）は・・・

焦　点

★本人発信（支援）
＊本人が思いを声にだせるように
＊意思決定の支援

認知症がある人だからこそ

認知症バリアフリー
＊本人からみたバリアをなくす

方向性
共　生　社　会
～日々の中で～
希　望

社会参加・参画（支援）
＊本人が望む社会参加（続けたいこと・やりたいこと）をともにかなえる
＊企画/計画・実施・評価に本人自ら加わる

方　　針
本人の声を起点に
～本人とともに、本人視点で～
人権ベースで、自分事

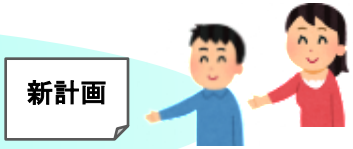
新しい認知症観

自分だったら・・・そうあってほしい、あたりまえのこと
*本人、家族、地域全体がから古い考え方の縛りから解放され、地域でともに

★同じ方向を向いて、方針・焦点をあわせ、力の結集：計画で推進を：

認知症施策に関する事業・取組に関わっている専門職・住民が、自治体内に多数いる。
※方向性や方針・焦点が不明確で共有できていないために、活力・総力を引き出せていない場合が多い。

★方向性
自分らしく希望をもって日常生活を過ごせる
わがまちなりの共生社会の実現を



計画づくりで
・方向性・方針・焦点の検討・確認・共有を。
・計画の中で明文化を

★方針：新し認知症観に基づいて
人権、自分事
本人の声を起点に　本人とともに、本人視点で
★焦点：本人発信（支援）－社会参加・参画（支援）－認知症バリアフリー

質の向上

様々な事業→

- 啓発 サポーター養成講座 ステップアップ講座
- 保健 健康教室
- 相談 個別支援
- 診断 医療 サービス
- ピアサポート 本人ミーティング
- 認知症カフェ 集い場
- 若年性認知症支援
- 初期集中支援
- 権利擁護事業
- 見守り・SOS体制作り
- 介護サービス
- 地域ケア会議 個別検討
- 認知症ケアパス 改良・活用
- その他

質の向上

本人の声を起点にした人材・チーム作り（チームオレンジ、ケアチーム、意思決定支援チーム等）

本人の声を起点にしたまちづくり：地域にあるもの・ことを大切に、連携・協働

地域固有の風土・文化・資源・つながり等に根差して

様々な事業は手段。事業中心の計画から人（本人、住民）中心の計画へ変革を。
＊方針・焦点を明示した計画を通じて、事業・関係者の質の向上も推進。

参考

藤枝市「認知症とともに生きる共創のまちづくり計画」

本人起点のまちづくり

【施策を進める上での基本方針（４つの柱）】

◆ 認知症の人の経験や声に基づいて施策を共に考えること

◆ 認知症を誰もが自らに関わりのあることとして捉えること

◆ 「希望ある認知症観」に立ち、施策の方向性を検討すること

◆ 世代や分野を超えた連携により、地域全体で横断的に取り組むこと

本人起点 → 自分ごと化 → 価値観の転換 → まちづくりの仕組みへ

2025年度認知症地域支援体制推進全国合同セミナー報告資料
認知症介護研究・研修東京センター、2026年1月

認知症施策推進画づくりの機会を、活かそう

参考：内閣官房　令和6年1月26日. 第1回認知症施策推進本部.

	2023(R5)年	2024(R6)年	2025 (R7) 年	2026 (R8) 年	2027 (R9) 年 ～ 2030 (R12) 年
政府 共生社会の実現を推進するための認知症基本法	公布 R5.6.16	施行 R6.1.1	→	→	→
政府 認知症施策推進本部		設立 R6.1.1	→	→	→
政府 関係者会議		設立 R6.1.1	→	→	→
政府 認知症施策推進基本計画		閣議決定 R6 12月	→	→	→ （少なくとも5年ごとに検討を加える）
都道府県・市町村計画			政府計画を踏まえて ★各自治体が作成	→	

本人３人が委員として参画

＊伴走者
認知症地域支援推進員
デイサービス施設や看護師

少人数からでも、同じ方向・方針で動き出そう

立場を超えて

本人の声をもとに
楽しく話しあい、
出た声を計画に
活かす（一つでも）

計画を通じて

共生社会の実現を
持続発展的に
共　創

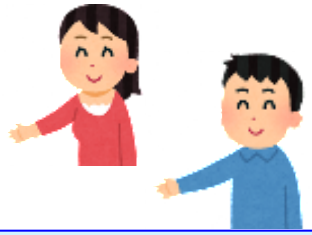
自分が暮らし、働く地域の今、
そして、これから

２．『新しい認知症観』に基づく施策の立案と展開のポイント

～各地の試行錯誤を参考に～

ポ　イ　ン　ト

★共生社会づくりを進めている自治体の取組より



1）「新しい認知症観」の実感的理解を：推進する仲間を増やす

2）ふだんから本人の発信を後押し、声を行政に届ける架け橋役の人を増やす
本人の発信力を高め、推進する仲間を広げよう

3）本人の声を起点に対話や話合いを重ねる：
目指すまちの姿、必要なこと、やるべきことを明らかにしよう

4）声を起点に地域にあるものを見つける・つなぐ・フォーメーションを
地域特性をフルに生かして、計画の実行可能性を高める

＊シンプル！　方向性・方針・焦点を大切に
＊焦らずに、今、できることを見つけて動こう

1）　「新しい認知症観」の実感的理解を：推進する仲間を増やす

※認知症観が、すべての施策・取組の出発点。古いままだと労多くして成果が得られない。
「新しい認知症観」への変革が、最重要テーマ。

新しい認知症観

＊認知症になったら何もできなくなるのではない。
＊認知症になってからも、一人ひとりが個人として
できることややりたいことがある。
＊住み慣れた地域で仲間と共に
希望をもって自分らしく暮らし続けることができる

政府計画策定の
関係閣僚会議での
本人3人の声から
成文化された

「知識」で留めず、自分ごととしてリアルに実感を
＊繰返し、何度も

一足先に前向きに暮らしている本人の声・姿に触れる機会を！

・自分自身が　　・職場の同僚・上司、他部署の人が
・地域の人たち誰もが（企業、本人、家族も含めて）
・多様な専門職（医療・福祉・介護・法律等の関係者）が

●自分自身が、「新しい認知症観」の実感的理解を

★「支援してあげる」「対象者」ではなく、人と人として

①本人と新鮮に出会う、出会い直す

・先入観、偏見を持たずに
・相談の機会、事業や活動の機会、実際の支援場面などなど

②本人がふだん過ごす場に出向く・ともに過ごす

・短時間でも➡「現場に出る」スタイルをあたりまえに
・繰り返し　➡ともにいる関係を育てる

③本人の自然な声・姿に触れる

★一人ひとりが有する個性・力に気づく力を磨こう
＊小さな発見を伝えあおう

★生きづらさ、不安等を「ありのまま」聴く

④本人一人から、丁寧に学ぶ：一人との接点を大切に

・表面的にたくさんの本人と関わっても、大事なことはわからない
・本人の体験や思い、気づき・工夫、望みを教わる

★出向いて本人に会ってみる、実感的理解を深める

都道府県の担当者自身が

【県担当者】　秋田県

・本人が、市の担当者らとともに、
介護事業所での話し合いに行くという
情報を耳にした。

・自分も同行させてほしい、と
市担当者を通じて依頼。

・短時間だが出向いて本人に会う。
同行中、本人と自然な対話。

・本人の「自分のまちをよくしたい、
自分ができることはやっていきたい」
という思いを、直接、聴けた。

★こうした本人が、わが県にいる！
本人を応援したい。
本人の力を借りて
県をよくしていきたい。

リアルに実感！
自分の言葉で

認知症本人についてのイメージを変える
本人は、地域をともにつくる欠かせない一員

★出向いて本人に会ってみる、実感的理解を深める

市町村の担当者自身が

役所に家族と相談に来る本人は・・・
　話さない、固い表情、家族が大変そう、家で暮らすのは無理？

本人が普段過ごす場に出向いてみたら・・・

できること、やりたいことがある！
地域の仲間とのつながりで自分らしい姿が保てる

★出向いて本人に会ってみる、実感的理解を深める

医療職が

医師：診察室の中では、固い表情で、何も話さない。
認知機能の低下が進み、自宅での暮らしは無理か・・・

地域包括支援センターの職員に誘われて本人が通う集い場にちょっとだけ行ってみたら・・。

○ぜんぜんちがう・・・
生き生きと活躍していてびっくり！

○自分の考え方ややってきたことを見直さなければ・・・。
これからのあり方を考えるいい機会になった。

（医　師）

＊「新しい認知症観」を持った医師が一人ずつ増えていくことで、、本人、家族等の安心、在宅生活の継続、地域連携等が拡充していく。

★本人一人から、丁寧に学んで、認知症観を変える

計画策定の関係者の
集まりで本人が語る

わかっていた
つもりだったが、
自分の考え方を
かえなければ。

委員会で本人と委員が対話

これまでの計画は
本人抜きでつくっていた。
今回の計画から、
新しい考え方に。

※計画策定に関してシンクタンク等に委託している場合には、
委託先の担当者にも、地元の本人に会って声を聴く機会を。

＊計画策定の関係者にこそ、本人と直接出会う機会をつくり、
「新しい認知症観」の実感的な理解を深め、
これまでの計画を質的にバージョンアップしていく意識の喚起を。

地元には、発信する本人がいない・・・？

岩手県矢巾町

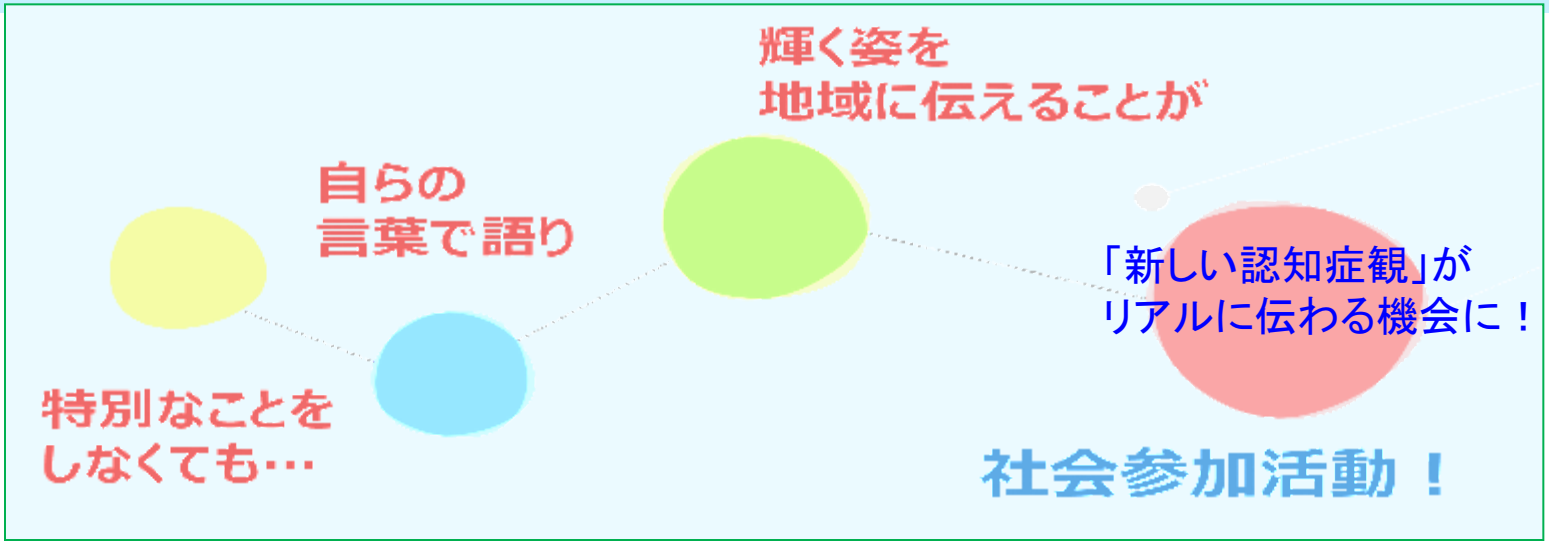
最初、多くの人が、うちの町には発信する「本人はいない」、「本人は、無理・・・

⇒認知症地域支援推進員が、介護支援専門員等を通じて、
ふだん話しをしている本人に依頼してみた。

「自分が役立つならいいよ～」 という本人が、一人また一人と増えていった。

家族、地域の人、
専門職の意識が
大きく変わった！

・家族やスタッフがおどろくほどいきいきと、そして堂々とお話しされた
・ご本人が自らの言葉で語る姿は見る人に大きなインパクトと感動



どうしても、まだ地元の本人の発信が進まない場合

住民・専門職・行政職が「新しい認知症観」に発想を変えるために

インパクトのある既存資材を、地域の多様な人に見てもらう機会をつくろう

認知症とともに生きる希望宣言
リーフレット

【新版】
本人にとってのよりよい暮らしガイド2026
（小冊子）

厚労省ホームページ
認知症本人大使
「希望大使」

★本人からのメッセージ
＊短い動画でリアルに

★NHK厚生文化事業団
検索　認知症とともに生きるまち大賞

＊日本認知症本人ワーキンググループのホームページから参照　office@jdwg.org

2）ふだんから本人の発信を後押し、声を行政に届ける架け橋役の人を増やす：本人の発信力を高め、推進する仲間を広げよう

★計画策定の時期をいかして、発信する本人、発信を応援する関係者を増やそう。

＊認知症の本人は、ふだんの中では声を出している！
＊本人の声を聴いてくれる人、発信を応援してくれる人がいると、
　本人は発信できる、発信を続けられる・発信力が高まっていく。

★中・重度になってからも

【参考】
『本人の声』を起点とした地域づくり・計画作りの手引き～中・重度の認知症の人の思いと力も生かそう～」
日本本人ワーキンググループ（JDWG）

本人の発信を後押しし、ふだんから声を聴く人、声を集めて行政等につなげてくれる人が重要

＊行政担当者だけで声を聴く、声を集めようと頑張りすぎないで・・・

自治体の中には・・・
ふだんから本人の発信を後押しし、声を聴いている人、
声をとらえて行政等につなげてくれる人が必ずいる。

★認知症地域支援推進員、地域包括支援センターの職員
★介護支援専門員
★ケア関係者　特に地域密着型サービスの職員
・認知症カフェ、集い場の関係者
・その他、地域特性に応じて
　　例　地域の世話役、ハブ役の人
　　傾聴ボランティア、社協のコーディネーター等

□これらの人たちを、行政担当者が知っているか？
　　＊同僚、先輩、関係者にも聞いてみよう。教えてもらおう。
□これらの人たちの力を借りているか？
　　＊「よりよい施策・計画にしていきたいから声を聴いて、
　　声を集めて届けてほしい」と呼びかけてみよう。

★計画づくりの機会に、これらの人たちとつながろう、関係を深めよう

よりよい計画策定、そして地域の支援の質を高める大事な契機にもなる

本人の発信をふだんから支えてくれるケア職員が、計画策定の委員会等で、本人が思いや意見を表す後押し

発信しやすく応援！

本人のふだんを知るなじみの職員が同行し、本人が発言しやすいよう、テーマについてわかりやすく問いかけ、意見を引き出す。

（介護保険策定委員会のグループワーク場面）

発信をさりげなくサポート！

一緒に活動してきたパートナーが、事前に討議内容について本人と話し合い、意見を引き出してメモしておく。委員会では発言しやすいよう、メモを置きながら、さりげなくサポート。

（検討委員会場面）

【参考】
『本人の声』を起点とした地域づくり・計画作りの手引き～中・重度の認知症の人の思いと力も生かそう～　日本本人ワーキンググループ（JDWG）

参考

市内の介護支援専門員に呼びかけて、本人の声を聴き、市に伝えてもらう呼びかけをする

～すべての始まりは　聞くことから～　宮城県大崎市

活動を考える大前提として認知症の人と家族の声を聴き，地域で暮らしていく上での課題を明らかにしたい

認知症の人と家族の実態把握調査「こころの声アンケート」を実施

＊認知症の人と家族に常日頃関わっている106人の市内の介護支援専門員に調査を依頼。
1人を選定し聞き取りを通し本音を聴くことで，認知症の人と家族の気持ちを知る。

➤アセスメント・よりよいケアに活かす

➤当事者の声をいかした認知症施策の展開に活かす

《4種類のアンケートを実施》
- ○ご本人用アンケート
- ○ご家族用アンケート
- ○介護支援専門員アンケート（調査に取り組んでの思い等）
- ○事業所用アンケート（事業所として調査を通じての意見等）

そのままの声
要約や加工せずにそのままの声を貼り出し、本人視点で話し合う。
同じような意味のものを分類。

＊当初は二の足を踏んでいた介護支援専門員が少なくなかった。

➡ 一人でもしっかりと本人の声を聴く機会を市としてつくった。
多くの介護支援専門員が声をちゃんと聴けていなかったことに気づく。本人の理解や本人との関係が深まり、ケアマネとしてメリットが大

➡二回目以降は、介護支援専門員が前向きに受け止め、スムーズに声が集まるようになった

参考

市内の介護サービス事業所や医療機関に呼びかけて、本人の日常の何気ない一言（つぶやき）を募集

和歌山県御坊市
ホームページより

本人の声に耳を傾けようプロジェクト

私たちは日々、介護や医療の現場で、認知症の方の何気ない一言に、ドキッ、としたり、クスッ、と思わず笑みがこぼれたり、時に勇気づけられることがたくさんあります。

そんな一言をみなさんと共有したいと思い、市内の介護サービス事業所や医療機関に呼びかけて、約1か月で400近い言葉が寄せられました。

ここでご紹介しているのはほんの一例ですが、その方の思いを、みなさんにも感じていただけたら嬉しいです。

そして、みなさんが耳にされた一言を、ぜひ私たちにも届けてください。「本人の声に耳を傾けよう」を一緒に広げて、認知症になってからもその方らしさは変わらないこと、日々それぞれが様々な思いを持って暮らしていることを見つけていきましょう！

御坊市認知症コーディネーター
「本人の声に耳を傾けようプロジェクト」

頭はバーやけど
みんな声をかけてくれる
家族と暮らす90代☆性

私、もうちょっと
ひとり暮らし頑張れるよね？
一人暮らしの90代☆性

トイレめんどくさいなぁ、
誰かかわって
くれんかなぁ…
小規模多機能事業所に通う
90代☆性

冷とぉーて美味しいよ
グループホームで暮らす
100代☆性

ここだったらこんなこと
（包丁で野菜を切る）
させてもらえてええわ！
家だったら息子が心配する
グループホームで暮らす
80代☆性

お父さん
死んだのかな？
いつもそばにいてる
気がする
デイサービスに通う
90代☆性

頭の中が
モヤモヤしている、
ワシは
どうなっていくんやろう…
家族と暮らす80代男性

しんどいよ…
違うんよ、
さみしいんよ…
グループホームで暮らす
70代男性

もう一人はいややで、
近所づきあいも
なくなったし、
この頃頭ややこしいわ
一人暮らしの90代☆性

あんたも大変やな～
肩もんだろか？
グループホームで暮らす
80代☆性

どこも悪くないのに
いつ帰れるんよ？
お父さんが残してくれた
家と車が心配…
一人暮らしの80代☆性
入院中

お～、
美味しそうやな、
ごちそうや、
あんたの分もあるんか？
家族と暮らす90代☆性

＊計画策定のみを目的に声を集めるのではなく、本人の何気ないひと言への関心を喚起し、ふだんの本人のリアルな言葉を通じて「新しい認知症観」を広げることを目的とした。
＊専門職が行政に「声を届ける」ハードルが下がり、ふだんの本人の声をもとに施策や取組を見直し、補強改善していく日常的な流れが生まれた。

３）本人の声を起点に対話や話合いを重ねる：
目指すまちの姿、必要なこと、やるべきことを明らかにしよう

※声を集めたがどうしたらいいか、立ち往生している自治体も少なくない。
いきなり声を整理・分類し、計画や事業内容につなげてしまう前に、集めた「そのままの声」をもとに、多様な人たちで、**率直に前向きに、楽しく**、話し合ってみることが大切。

＊本人は「声」を通じて何を求めているのか、本人視点に立って、みんあが自分事として話し合ってみる。　**＊できたら本人を交えて。**

＜本人の具体的な声をもとに、話し合いたい内容＞

・目指すまちの姿：どんなまちになってほしいか　➡【計画の目標】

＊「共生社会」、「安心して暮らせるまち」等を、本人の声をもとに、地元ならでは目指すまちは、どんな姿なのか、話し合う

・切実な課題：どのような体験をし、どんな課題があるか　➡【課題】

＊本人の声の中から、本人でないと気づけない課題（様々なバリア等）や暮らしていく上で優先的に必要な課題を

・必要なこと・やるべきこと：何があったらいいか・やるべきか　➡【重点的施策・事業】

＊本人の声をもとにすると、大がかりのことや新たなことではなく、ごく日常的な小さなことや、すでにある取組や資源を活かして補強、連動することの重要性が浮かび上がることが多い。

本人の声をもとにした対話を通じて、当事者の暮らしに実質的に役立ち、地域に根差した実行可能性の高い計画がつくられていく。

参考

地域にある集まりの場を活かして、本人の声をもとにどんなまちだったらいいか、楽しい対話を重ねる

本人ミーティングで
～暮らしやすいまちにむけて～

戸外での集まりで
～暮らしやすいまちにむけて～

ともに活動をしながら
～暮らしやすいまちにむけて～

静岡県藤枝市

＊どんなまちだったらいいか、本人の声をもとに、本人、そして、様々な人たちが自然体で対話し、そこで出た内容を大事に積み上げている。

＊本人の声の中には、「自分もそうだなぁ」、「自分もそうあってほしい」と実感　・共感できる声が多くある。自分事として、目指すまちをともに考え、できることをみつけて、自然体で自発的に動き出すきっかけにもなっている。

参考

ワークショップ等を開催し、本人の声をもとに、どんなまちだったらいいか、対話を重ね、計画に反映

鳥取市
認知症施策推進計画策定ワーキンググループ

□開催頻 令和6年3月から同年11月まで
（全6回）その他、必要に応じて開催

□メンバーの構成
（1）本人
（2）本人にかかわる人々 パートナー
（家族・友人等含む）
（3）介護保険サービス事業所、医療機関、
地区医師会、地域支え合い推進員、
地域包括支援センター
認知症地域支援推進員等

参照　令和7年度 認知症地域支援推進員研修
【新任者研修】実践報告資料

藤枝市
<u>認知症ともに生きる共創のまちづくりワークショップ</u>

□開催　令和7年2月、6月

□メンバーの構成
（1）本人
（2）本人にかかわる人々 パートナー
（家族・友人等含む）
（3）**地域住民**：
10代から80代までの市民
（4）**事業者**：一般企業、商店、
医療・介護従事者
学生
（5）藤枝市役所職員

参照　令和7年度　認知症地域支援体制推進全国合同セミナー
報告資料

参考

市役所全体で、本人の声を起点に、話し合う機会をつくる

＊新しい認知症観の理解の広がり、本人起点で分野を超えた連携・協働の契機に

本人の暮らしは、
さまざまな分野とのつながりや関わりがある！

市役所でも～本人の声を起点に～

地域防災課、道路課、河川課・水害対策室、
感染症対策課、健康推進課、介護福祉課、
健康企画課、農業振興課、教育政策課、
市民相談センター兼消費生活センター、
生涯学習課、こども発達支援課、図書課、
交通安全・地域安全課、産業政策課、
男女共同参画・多文化共生課、商業振興課、
地域交通課、福祉政策課、建築住宅課、
市立総合病院地域医療連携室、人事課

暮らしやすいまちに向けて
分野を超えて話しあう。

立場を生かしてできることを大切に
「ために」から『ともに』へ

参考

県の庁内全部局のトップが参集したトップセミナーを開催（知事も）
～部局をこえて、話し合う～

香川県　2025年9月

「新たなステージ」へ、ともに

思いがけない部局が、早期からの本人との接点・協働・参画のきっかけに
・警察、交通、商工、教育
★防災、土木、文化芸術、デジタル

基本法、方向性と方針・焦点、
全国の先進事例をリアルに紹介

➡自分事
共生社会の実現に
関係のない部局はない

➡他部局の最前線では
認知症の人とたくさんの
接点が日常的にある

➡本人起点で連携・協働を
連携すると互いにメリットある

➡県レベルで率先して連携すると
市町、関係者、住民が助かる。

4）声を起点に地域にあるものを見つける・つなぐ・フォーメーションをつくる
＊地域特性をフルに生かして、計画の実行可能性・効果を高める

※人手がない、人材不足・・・

参考

本人を起点に、暮らす地域にあるものを（再）発見、見える化してみる

➡呼び水になって、住民、専門職、関係者から見えずにいた地域に人/資源が次々と明らかに

▶自治会　▶民生・児童委員（協）▶（地区）社協
見守り協力者、集落支援員、婦人会、老人クラブ　地域の長老
▶消防団、防犯・防災メンバー　祭の関係者
▶寄り合いどころ（地域サロン等）
▶町の趣味・文化・運動サークル、
ウオーキング好き、ラジオ体操の会　▶犬の散歩仲間、動物
▶未就園児母子、子ども会、学童クラブ　▶子育てサークル
▶青年部、若者/グループ　、団塊の世代
▶ボランティア（地元の会）施設慰問グループ
▶介護者の会、家族の集い　NPO
▶同級生つながり、同僚つながり　など

▶個人商店（八百屋、魚屋、肉屋等）、スーパー、コンビニ、コープ
直売所　▶飲食店　ホームセンター、大工、お寺
▶薬局　▶理美容店　▶針灸院、整骨院、マッサージ
▶宅配業者、新聞店配達、ヤクルト、牛乳、ゴミ回収業者
▶タクシー、バス、駅・鉄道、トラック、ガソリンスタンド
▶銀行、信用金庫、郵便局
▶カラオケ、パチンコ
▶農家、農協、漁協、商工会
▶工場、倉庫
地元企業　メディア

民　産
本人・家族
学　官

▶多様な医療・介護・福祉事業所

▶近くの大学
▶高校　学校
▶中学校
▶小学校
▶保育園,幼稚園
送迎バズ
子供たち
先生たち
PTA

▶市職員、
地域包括支援センター
保健センター
老人福祉センター
公民館
▶消防本部
▶警察　など

参考・富士宮市資料

わが町の風土・自然・季節、文化等の中で

★領域を越えたつながりが、新たな解決力を生む
★専門職・行政職も地域の一員
★本人、家族も、共生のまちづくり・施策推進の大事なパートナー！

参考

本人の声から、暮らしていくために切実に求められている課題について
自治体担当者等が新たな領域の関係者に出会い、対話し、一緒に動き出す

●「生活の足である車をそう簡単にあきらめられないのです！」

➡担当者（推進員）が自動車学校にアプローチ

➡うごまちハッピー運転教室＆Ｄカフェ

秋田県羽後町

●新聞やテレビのことばが怖い
（古い認知症観のままの記事や言葉使い）

➡担当者（推進員）が地元の新聞社・記者にアプローチ

➡地域の活動場で本人に会ってもらい、新しい認知症観について実感してもらう

＊記事が変わった！

＊新しい認知症観に基づく取材・記事を次々と

日高新報

あがら花まるで餅まき

認知症対応型デイ

利用者自ら発案、企画

メディアの力を借りる・活かす・伸ばす

和歌山県御坊市

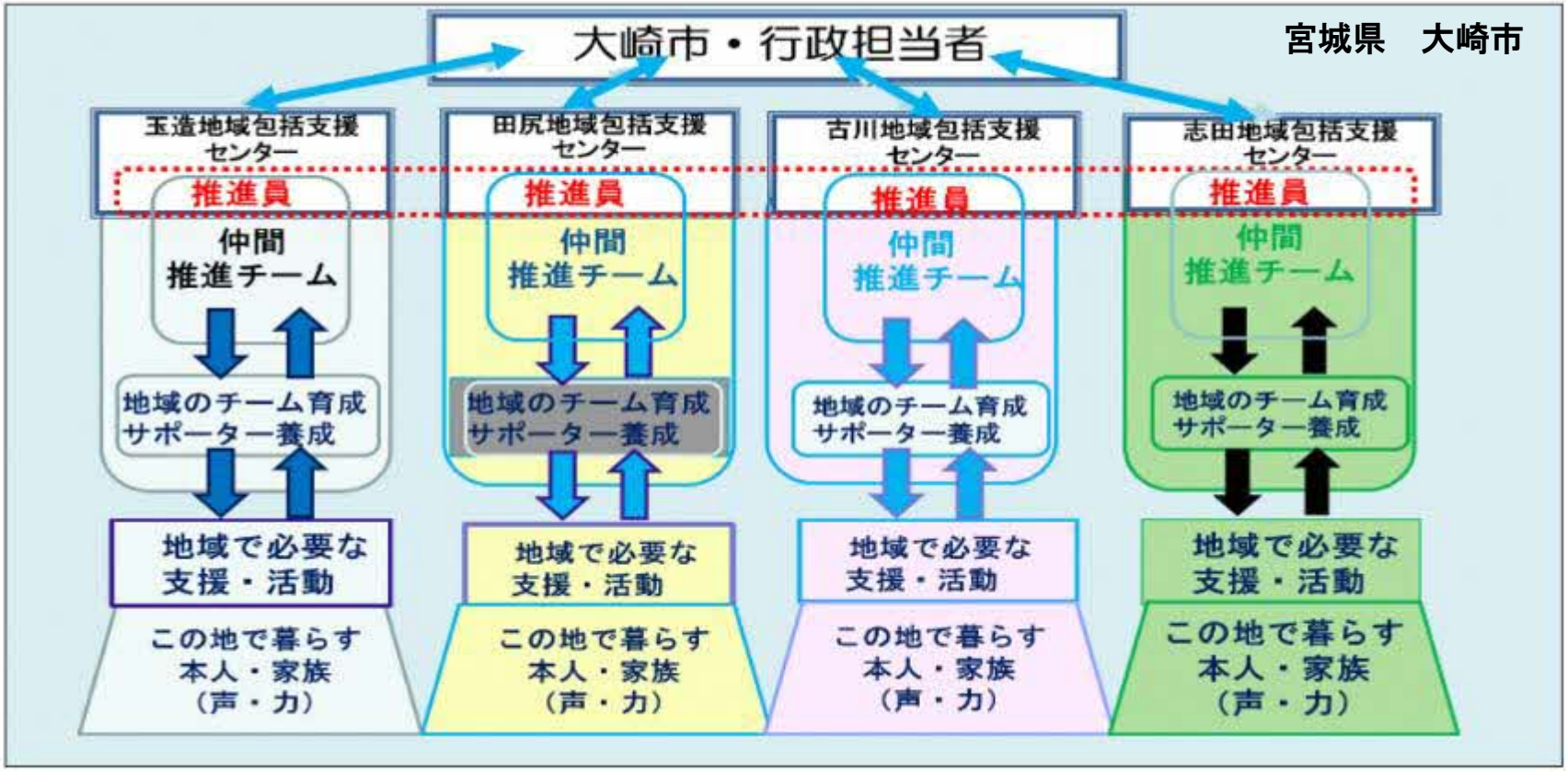
※限られた人/資源なのに、連携や協働がなかなか進まない

参考

本人の声を大切にする人材（仲間）・推進チームをエリアごとに市が経年的に育てている

⇒各エリアごとに工夫しながら地域活動を自主的・持続発展的に展開することを推進

＊市の担当者が異動しても、チームメンバーが新たな担当者と方針・情報を共有。協働して推進



★本人の声、家族等の声、現場の声を、認知症地域支援推進員がとらえて行政に届ける

➡行政が事業・計画に反映する流れ（循環する仕組み）とそのフォーメーションを

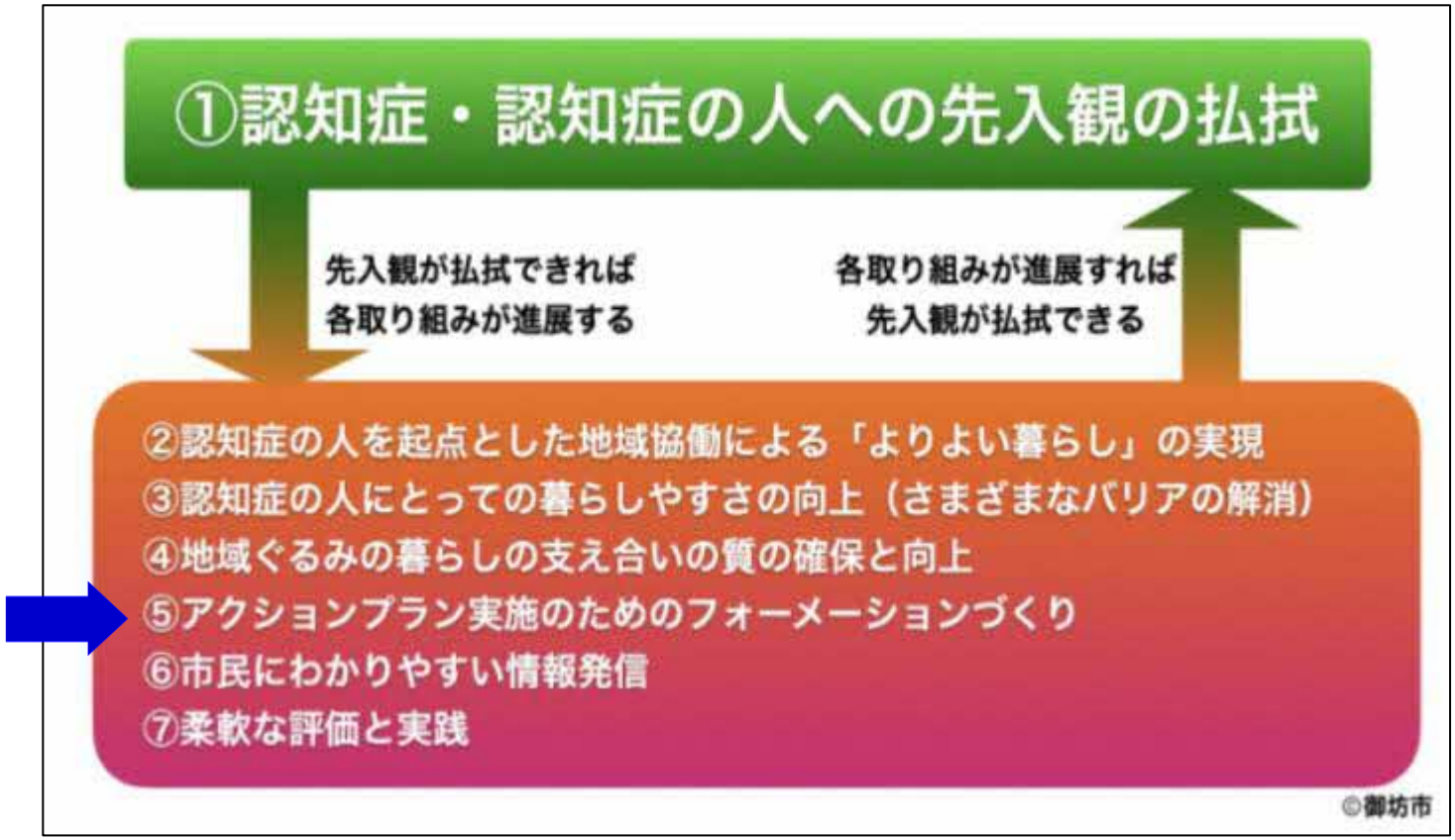
行政と推進員等が協働しながら経年的に育てている。

＜認知症地域支援推進員：本人の声、地域・現場の声を行政につなぐ架け橋役＞

参考

計画の重要な指針（柱）として、フォーメーションづくりを計画にしっかりと盛り込み、
経年的にフォーメーションを育てる

「御坊市認知症施策推進基本計画」



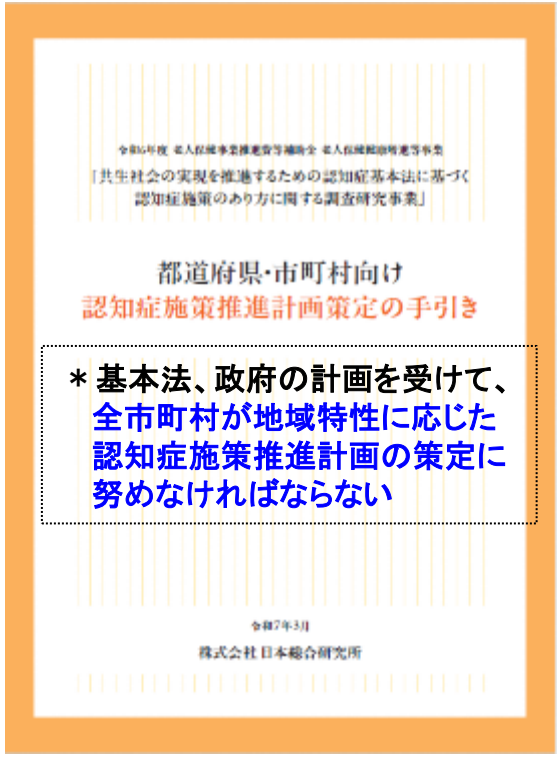
「第9期介護保険事業計画」 第5章「認知症支援の充実」（p.106～109）に掲載

御坊市ホームページで公開

認知症施策推進の鍵は、行政担当者と認知症地域支援推進員との協働

参　考　令和7（2025）年3月

＊令和7（2025）年度から、国が推進員の役割の見直し・強化を推進



＋

＊各市町村が計画を検討・策定するにあたって、重要な施策の推進体制についても改めて検討が必要

＊とりわけ、この計画策定を契機に、共生社会の実現に向け、期待される推進員の位置づけ・役割を明確にすることが重要

＊推進員は事業をこなす存在ではない。

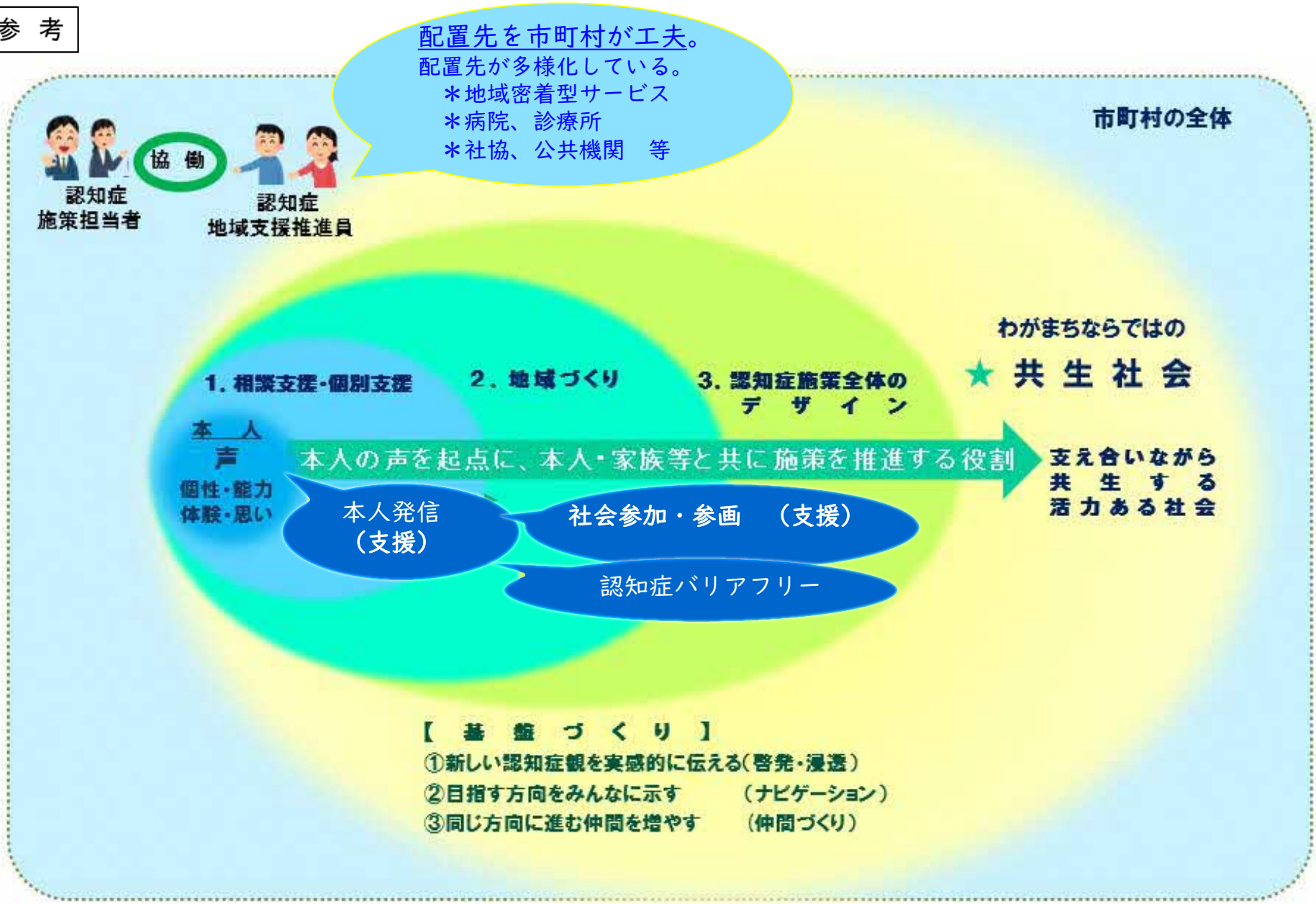
＊市町村担当者と推進員が目指す地域についての対話を重ね、共生社会の実現を目指し、認知症施策を協働して推進していくために期待される推進員の位置づけ・役割を検討・論議する

＊推進員の位置づけ・役割は、画一的・一律のものではない：市町村それぞれで再検討を

＊今は、各市町村で推進員の位置づけ・役割を見直し、明確にする大事な時期！

計画策定を機会に、わが町の将来を見据えて、推進員の配置のあり方と役割機能について率直に話合い、見直しと強化を

参考



市町村担当者と推進員との協働のための工夫の様々（主なもの）

検索➡認知症地域支援推進員活動ガイド（2023年3月版）

◆行政担当者/関係者　◆推進員

気軽に話し合える関係づくり

◆対等が一番！対等で一緒にと常に伝えている
◆近くを通ったら立ち寄って、少しでも顔を見に
◆提案にはまずは、いいね！と。提案を大事に
◆忙しくても、会議の前後は、立ち話をするように
◆遠慮しないで、経過や相談事を細かく連絡してる
◆担当者の資料等でいいなと思う点を伝えている

一緒に地元の本人の声を聞く

◆毎週半日は、現場に行くと決めている推進員も知ってるので声かけてくれる
◆声聞くとか構えず本人がいる場に遊びにいく
◆時々上司に、一緒に行きましょうと　誘ってる（上司も、案外喜んでいる）
◆特に新任の担当者に、現場に来て～、と繰り返し声をかけている
◆散歩や花植えとか企画をし、楽しく参加しながら、自然な声を聴いてもらう
◆本人と一緒に役所に遊びに行き担当者　に会って話している

活動の焦点の共有

◆焦点を絞ってやることで。結局はどの事業も中身がよくなっていく
◆推進員は、事業をこなす人でなく、本人と一緒に創っていく人だと話しあっている
◆活動の焦点３つはつながっているから自然にやればいい
◆活動を通じたちょっといいエピソードを担当者とどんどん共有している
◆３つに焦点は、特別なことでなく、基本の基、といつも話しあっている

わが町の共生のイメージの共有

◆推進員さんにイメージ図を書いてもらってみんなで話し合った
◆自分事として話し合ってみた
◆本人の話を聞いて話し合った
◆本人と一緒に町歩きし、その時の様子をもとに、まちがどうなってほしいか一緒に考えた
◆本人たちの実際の場面をもとに地図に落とし込んで話し合った
◆担当者と折に触れて共生の具体について話し合っている

その他、工夫していること

◆計画や企画の最初の頃から感触やアイディアをきくようにしている
◆推進員さんが必要な時、他部署の知合いをつなぐ
◆役所の大きな会議に参加してもらいつながりをつくる
◆担当者がやる集まりや行事に出向き準備等を手伝う
◆研修等で入手した資料の大事なページを、コピーして渡して、話しあっている
◆おかしいなと思うことは、あいまいに流さず前向きに意見や提案をしている

いきなり共生社会が実現するのではない。

＊新しい認知症観にたった施策に舵を切り、中長期的・計画的に推進を。

➡人と人との（小さな）共生を日々の中から生み出し、地域全体に浸透を

参 考

小さなまちでも、大きなまちでも

本人の起点で、本人の声と力を大切に、ともに

人・場・こと・事 業をつなげながら

本人発信（支援）

社会参加・参画（支援）

認知症バリアフリー

目指すは、わがまちなりの”共生社会“

全国の実例集

認知症地域支援推進員
活動情報集
【地域共生編】

動　画

各市町村の推進員の配置・機能強化のために、視野を広げて全国の情報の共有活用を

＊人口規模の異なる自治体の情報からも、学べることが様々ある

めざす姿の実現にむけて施策を着実に進めよう　＊市区町村－都道府県－国が重層的に

いつでもどこでも尊厳を保持しつつ希望をもって、自分らしく暮らすことができる

わがまちなりの共生社会

一人一人が個性と能力を十分に発揮し相互に尊重しつつ支え合いながら共生する活力ある社会

＜市町村・認知症施策推進計画＞

固有の地域特性（風土・文化・社会資源等）を大切に活かしながら
認知症の本人の声を起点に、わがまちならではの共生社会をともに築いていく

市　町　村

都　道　府　県

＜都道府県・認知症施策推進計画＞

市町村が地域特性を活かした施策を展開していけるための推進・後押し・環境整備

国：政府、厚生労働省、関係省庁

＜共生社会の実現を推進するための認知症基本法・認知症施策推進基本計画＞

都道府県・市町村が地域特性を活かした施策を展開していけるため推進・後押し・環境整備

本人のことばより

●一人ひとりちがう。どう暮らしてきたか、どうしていきたいのか。
　年寄りとか、認知症とか、ひとくくりにされるのは勘弁してほしい。

●だめ、しないでいい、あぶない・・・、そればっかりいわれる。
　情けない。いやんなる。　少しでいい、自由にさせて。

●カフェとか、デイとか、行くように言われても、つまらなそう・・・。
　自分の時間、もっと大事にしたい。

●外にでたい！　気晴らししたい！　働きたい！

●世話になる一方は、つらい・・・。
　おとうちゃん（夫）やこどもたちのためになりたい。仲良くしたい。

●絶望なんてしてられない・・・！　一日一日がもったいない。

本 人 か ら の メ ッ セ ー ジ

「話せないから、無理・・・？」

「うまく言えない人こそ、思いがたくさん詰まってる」

「そういう人にこそ、味方になってくれる人が、
ふえてほしいなあ」

「だいそれたことでなく、小さなことでいいから」

一人ひとり、すごい底力を秘めている

認知症になってからも、自分らしく
あたりまえに暮らし続けられる地域に
（自分事として）

本人と家族、一部の人だけでがんばる時代ではなく
地域でともに生きていける共生社会を、一歩一歩、ともにつくる

＜まちぐるみの変革を、日々のなから計画的・中長期的に＞

情報

会おう！ 話しあおう！ 地元をよりよく変える手がかりを見つけよう！

令和8（2026）年度 認知症地域支援体制推進

全国合同セミナー

声かけあって
どうぞご参加ください。
＊一部分でも参加OK

開催日：2026年8月4日(火)～5日(水)
開催方法：ハイブリット
◇ 会場参加：認知症介護研究・研修東京センター（杉並区高井戸西1-12-1）
◇ オンライン：Zoom　※お申込者に、アクセス方法等をメールでお知らせします。

— 今回の焦点 —
わがまちならではの
◆ 認知症施策推進計画をつくる
◆ 計画づくりのプロセスを活かす
＊本人ミーティングやチームオレンジ等の情報共有もあり

対象者
1)市区町村の認知症施策のご担当者
2)自治体で地域支援体制づくりに携わる関係者（認知症地域支援推進員等、推進役の人）
＊原則2)は、1)か3)とご一緒にご参加ください。
3)都道府県の認知症施策のご担当者
参加費用　無料

プログラム
○ 認知症施策の最新情報
○ サプライズトーク
＊市の計画策定に参画した本人のメッセージ
○ 担当者による実践報告
＊大都市、地方市、小規模な町から
○ リレートーク
＊全国各地の試行錯誤の実際をリアルに報告
○ 地域での実際の取組みの動画上映

▶ 途中でグループワーク
・情報交換、話し合い
・手がかりや工夫の共有
・やること、できることを見つける
＊疑問や悩みの解消を！

会場参加の場合
人口規模が近い他地域の人と

オンライン参加の場合
出来るだけ地域の複数名でご参加いただき、この機会に率直な話合いを

できることが見つかり、元気になるセミナーです

［昨年度の参加者の声より］
■ 忙しすぎ、やることが多すぎて、行き詰まっていた。セミナーに参加したら、同じような苦労しながらも前向きにやっている人がたくさんいて、手がかりや出来そうなヒント、元気をいっぱいもらった。
■ サプライズトークの本人の声に、ハッとさせられた。本人発信とか難しく構えずに、地元の本人に会って声を聞くことで、行政としてやること・できることが見つかる道筋がつかめた。
■ セミナーで知り合いができた。その後も連絡や相談できて助かっている。

お申込みはこちらから

https://ushinin.jp/ushinin/ushinin-event/event-No8-1/dre

【全国合同セミナーに関するお問い合わせ先】
社会福祉法人浴風会 認知症介護研究・研修東京センター　全国合同セミナー担当まで
メール：cmr@dcnet.or.jp　/　電話：03-3334-1150（土日祝を除く 09:00-17:00）

声をかけあって、
どうぞご参加を。
（一部の時間でも可）

□厚労省より最新情報

□本人によるトーク
今、求めたいこと（仮）

□施策と計画づくりの
実際の報告
＊人口規模の異なる
3自治体より

□グループワークで
・情報共有と話し合い
・疑問等の解消
・自地域でできること
補強策の検討

＊ネットワーキング

情報

認知症フォーラム

テーマ：「捜索終了」から始まる真の支援

～残された家族の『待ち続ける』という葛藤に伴走する～

【捜索の「後」を支える――長期行方不明者家族への伴走】
「発見」がゴールの支援で、十分でしょうか。大規模捜索が終わり、周囲の関心が薄れた後も、
家族の葛藤は続きます。
本フォーラムでは、未発見のまま長期化した家族が抱える「終わりのない喪失感」に焦点を当てます。
行政や地域包括支援センターがどのようにその苦しみに寄り添えるのか、
当事者の声からこれからの支援を考えます。

2026 7.10（金） 13:00-16:30

会場：（社福）浴風会　認知症介護研究・研修東京センター
オンライン：ZOOMウェビナー　　ハイブリッド式

参加無料

【第1部】
現状と課題の共有：何が起きて何が壁か
13:00 開会・趣旨説明
主催者挨拶：長期行方不明支援がなぜ「制度の狭間」なのか
13:10 動画視聴
13:20 課題提起
(社福)浴風会 認知症介護研究・研修東京センター センター長特任補佐 永田 久美子 氏
「認知症行方不明のままの家族の声に学び、ともにアクションを」

【第2部】
当事者家族が抱える様々な問題
13:40 当事者家族の声(4家族登壇)
捜索が打ち切られた後の孤独、周囲の言葉に傷ついた経験、
行政等に求めたかったこと、経済的手続き（銀行口座、年金）、介護保険の資格、
不在者財産管理など、現場で直面する法的・事務的課題の整理
14:30 休憩

【第3部】
パネルディスカッション
14:40 ディスカッション：「捜索後」のバトンをどうつなぐか
警察・行政・包括・地域の役割分担と連携、その具体的ルートについて
16:10 質疑応答・まとめ
16:30 閉会

【お問い合わせ】
NPO法人いしだたみ・認知症行方不明者家族等の支え合いの会
mail info@npo-ishidatami.org

お申込み
右記の専用フォームより
お申込みください。
締切6月26日

主催：NPO法人いしだたみ・認知症行方不明者家族等の支え合いの会
協力：（社福）浴風会　認知症介護研究・研修東京センター
※このフォーラムは、「社会福祉法人 聖明会 令和８年度 福祉開発援助事業」の助成により運営しています。

◆行方不明のまま
未発見のケースが
毎年200件以上。

◆未発見ケースに必要な
対応は，認知症施策の
エッセンスです。

◆フォーラムでは、
行方不明者の家族4名が
体験と何があってほしい
かを語ります。

◆家族と警察、自治体職員
地域包括支援センター
職員が、今後の取組等に
ついて討議します。

主催
NPO法人いしだたみ
認知症行方不明者家族等の
支え合いの会
（協力）
認知症介護研究・研修
東京センター